

〔書評〕

金子貴昭著 『近世出版の板木研究』

廣瀬 千紗子

本書は、およそ前例のない「板木^{はんぎ}」の研究書である。板木は、板の表裏両面に文字または絵が彫刻された長い板で、標準的な外寸は四丁張^{ちようばり}（後述）の場合、縦二〇糎前後、横七〇〜八〇糎、厚さ二糎前後。板面に墨をかけ、一丁（二頁）分の紙を置いて何度も摺刷するため、板の両面に墨が付着して黒く、重く、非常に扱いにくい。彫刻は通常、陽刻だが、板面の文字と絵は裏向きになるので読みづらい。その数量は、「単純に思いつくだけでも十数万枚が現存している」とのことだが（本書二九頁。以下同）、何百年も昔の板のことである。破損、焼失した板木は計り知れず、その残存自体が偶然の結果であろう。ちなみに、本書は近世の板木を対象とするが、管見の限り、現存する板木は南北朝期頃の經典が上限かと記憶する。また、近世にあつては、板木は摺刷の道具であると同時に版權そのものであり、板木の所有は版權の所有と同義であつた。

いうまでもなく板本は、板木を摺刷したものであり、「板木なくして、板本は存在しないし、板株（版權）という問題も扱ふこ

とはできない。板木は近世出版の根本資料なのである」（五頁）。全くそのとおりだが、現実には、日常的に板本を扱っている者でも、板木を手にする機会は稀である。場合によっては皆無に近く、たまたま手にしても数枚程度のことだろう。板木が身近になれば、それも当然である。ところが幸いなことに、著者は職務の一環として、奈良大学博物館所蔵の龐大な板木の山に遭遇された。すなわち、永井一彰氏の収集にかかる、知る人ぞ知る板木の一大コレクションである。その数、五八〇枚に及ぶという。しかも、その大半が、竹苞楼佐々木（錢屋）惣四郎、文政堂藤井（山城屋）佐兵衛という、現在盛業中にして、江戸時代京都の有力書肆の旧蔵である。これらの板木の調査と、デジタル化を敢行された著者は、板木の一枚一枚を明確に「研究資源」と位置づけ、摺刷にとどまらず、板木の細部にまで備わる、あらゆる機能の解明に着手された。今、事も無げに「板木の調査と、デジタル化」と書いたが、小稿冒頭にふれたように、その形質上、板木は嵩高く、扱いが厄介である。その厄介な作業を克服するための板

木のデジタル化たるや、これまた劣らず面倒な作業で、全板木五八〇〇枚、総計九万カットが撮影された試行錯誤のあととは、第一章、二二頁―四八頁に詳しい。そのような地道な苦勞から得られた新知見の数々が、本書に収録された諸論考である。

右に経緯を述べたとおり、板木の实物に即して説得力のある数量を調査した上での、基礎的な板木の研究書は、本書をもって嚆矢とする。これは、出版研究の今日的な意味において、特筆すべき快挙である。その快挙を用意したのは、永井一彰氏の長年にわたる精力的な板木の収集・調査、ならびに一連の御研究であり、その趣旨を継承されたのが著者であった。両氏の尽力によって、ようやく今日の板木研究の座標軸は示されたといつてよいだろう。すなわち「板木の物理的な基本構造を探り」、「板木から得られた情報を板本書誌学に還元」すべく、「板本書誌学の構築」（以上、一五頁）が提唱されたのである。もとより、ほとんど先例のない領域であるが、著者は板木に残るわずかな痕跡の意味を考え、該当する板本と照合し、出版記録と連動させることによって、思いもよらなかった当時の〈現場〉を復元することに成功している。これらの臨場感あふれる実践こそが「板本書誌学」のための方法論の開拓であり、「板本書誌学」への道は、その方法論の構築とともにあったのである。

以下、すべての論考には言及できないので、目次を掲げて全容を示す。

序章 研究資源としての板木 はじめに／第一節 板木から分か

ること／第二節 板木をめぐる研究界の動向／第三節 板木資料の活用・共有化へ向けて／第四節 板木を研究資源として扱うための課題と本書の構成

第一章 板木活用の意義と実践 はじめに／第一節 なぜ板木は重要か／第二節 なぜ板木は活用されてこなかったか／第三節 デジタル化の方法／第四節 板木研究におけるイメージデータベースの必要性／第五節 イメージデータベース構築／第六節 デジタル化、イメージデータベースの効用／おわりに

第二章 板本の板木―その基本的構造― はじめに／第一節 板木と板本／第二節 板木の基本構造／第三節 入木／おわりに
第三章 板本に表れる板木の構成―紙質・匡郭― はじめに／第一節 混在する紙質の出現パターンと板木の構成―立命館大学アート・リサーチセンター所蔵『和歌麓の塵』を例に―／第二節 匡郭縦寸の高低差と板木／第三節 木材としての板木―木材乾燥と収縮―／おわりに

第四章 出版記録から読み取れるもの―竹苞書樓の出版記録― はじめに／第一節 佐々木惣四郎の出版記録（その一）―出版の現場を伝える情報―／第二節 佐々木惣四郎の出版記録（その二）―蔵板記録―／第三節 佐々木惣四郎の出版記録（その三）―『書林竹苞樓藏版略書目』／第四節 諸記録の参照によつて判明すること／おわりに

第五章 近世における板木の役割―摺刷以外の板木の機能― はじめに／第一節 板木の外見／第二節 「白板」の語意／第三

節「白板」の機能／おわりに―近世出版における板木の役割―

第六章 池大雅『賞奇軒墨竹譜』の板木―初版から現在までを辿る―はじめに／第一節『賞奇軒墨竹譜』の板木／第二節出版記録／第三節『賞奇軒墨竹譜』の刊行事情／第四節『賞奇軒墨竹譜』の諸本／おわりに

第七章 高野版の板木―奈良大学博物館所蔵本を中心に―はじめに／第一節 高野版の現存板木／第二節 高野版の板木と巻き摺り／第三節 山上と山外／おわりに

第八章 藤井文政堂所蔵 享保十七年版「十卷章」の板木―袋綴じと粘葉装―はじめに／第一節 藤井文政堂所蔵「十卷章」の板木とその板木／第二節 享保十七年版の摺刷方法とその目的／第三節「十卷章」の板木売買―藤井文政堂板木売買文書から―／おわりに

終章 課題と展望 第二節 総括／第二節 本論の特質―デジタルアーカイブについて―／第三節 課題・展望
初出一覧／あとがき

序章「研究資料としての板木」、および第一章「板木活用の意義と実践」は、「板木資料を学会共通の研究資源」(二三頁)とするための前提であり、本書の総論といえる。それはつまり、画像データ共有のための、イメージデータベース構築ということだが、すでに、立命館大学アート・リサーチセンターの「板木閲覧システム」が稼働しており、懇切に配慮された検索画面が紹介さ

れている(三九頁)。この検索結果から得られた成果が、「板木の分割所有の可視化」(四〇頁)、「板株移動の時期を示す資料」(四二頁)で、データ活用のさきがけである。

第二章「板本の板木」は、板木あつての板本だからこそ、板本には「入木」や削除の跡が残り、板木の状態が溯源できるが、それだけでは、「板木は板本上に表れた現象の裏付資料になってしまふし、板木研究は板木が存在しない板本にとって何らの役にも立たない」ものになり兼ねない。そこで、著者は板木研究の目的を、「板木を板本の付随資料として扱うのではなく」、「板本を見ただけでは分かり得ない」事実を板木によって示し、「板本書誌学」や「文芸研究を刺激することである」(以上、五三頁)と表明する。その好例は、永井氏による、「端食」(板木の反り止め)の形状による編年であるが、板面の彫りの深さもまた新旧の判断材料となる(六七―七〇頁)。あるいは、入木は通常、訂正・加筆・削除など、板木の修訂のために施されるが、浮世絵版画では、人物の頭部の精緻な毛髪などは、部分板木の再利用を前提とした入木であり(序章、六頁)、板に節がある場合も、入木で補正する(七三頁)。いずれも板木にだけ残る痕跡である。

第三章「板本に表れる板木の構成」を理解する一助として、本書の掲載順とは前後するが、次に板木の基本構造にふれておく。
①おおむね板木一枚につき片面に板本の二丁(四頁)分、両面で四丁(八頁)張。片面一丁分、両面で二丁張も多い。

②表面の二丁分は、板本の一丁目と四丁目、裏面の二丁分は、板

本の二丁目と三丁目を彫る（表面の丁付は連続しない）。

③四丁張の場合、片面二丁分の天地は左一丁、右一丁で逆方向になる。

さて、『和歌麓の塵』中本、三冊は、一書で紙質の異なる紙が使われているが、すべての丁付を検証した結果、この紙質の出現パターンが四丁単位であることから、四丁張の板木が使われたと推定された（九〇頁）。また、『北辺随筆』大本、四冊ほか、わずか数枚が残る板木からも、板本の匡郭縦寸の高低差を四丁張の原則に組み合わせて、全丁の板木構成が復元されている（九二―一二七頁）。これらは、板木の基本構造から、板本と板木の新たな関係が見えてきた論考である。

第四章「出版記録から読み取れるもの」、第五章「近世出版における板木の役割」は、従来「出版の記録として読まれ」て来た本屋仲間の記録や板元の蔵板書目を、「板木を運用した記録として読むべき部分を含んでいるはず」（二七四頁）、という視点で読み込んでいる。たしかに竹苞楼の資料からは、板木の移転先が判明し、相合板（共同出版）の持ち合い方は、出版事業を立体的に示す。また記録をよく読むと、語意についても再考すべき点がある。その一は、「入銀本」で、刊行前に売弘所から注文を取るべく、板元が最終の校合摺を内容見本として利用する場合をいう（二七頁）。その二は「白板」で、通説の「未刻の板」ではなく、まだ墨のついていない摺刷前の板をいう例（二七六―一九四頁）である。

第六章「池大雅『賞奇軒墨竹譜』の板木」は、希有なことに、該書の全板木が揃い、かつ出版記録も残るという。類板、板木の移動、留板、諸本の詳細な検討から、板本に表れない紆余曲折が判明したのは、板木による板本研究の最たる成果であろう。第七章「高野版の板木」で報告される「巻き摺り」も希少な事例で、折本では製本が先で、後から摺刷していたことが明らかになった。高野版とみなすべき範囲についても、高野山上に限らず、山外に残る板木も含めての再検討を促している。これを受けて、第八章「藤井文政堂所蔵 享保十七年版『十卷章』の板木」は、刻面が片面のみで半丁に分断され、板心の板木が別にあるという、特異な形状の「高野版の町版」（二五〇頁）に注目し、高野版には粘葉装もあることから、町版は同じ板で「粘葉装と袋綴じの双方に対応することが可能」（二七六頁）と結論づけた。さらには、板木の売買文書から、板株、焼株、寺院と板元との関係を示唆する。いずれも、板木と関連資料を駆使した好論である。

思えば、中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（一九九五、岩波書店）初出は『新日本古典文学大系』の月報連載）において〈板本書誌学〉が提唱されたのには瞠目したが、以来、二〇年に満たずして、このたび〈板本書誌学〉が提唱されたわけで、この速さには驚かされる。まさに板木イメーヂデータベースの構築と活用が、同時に実現した結果であり、快挙たる所以である。ただし、本書の全体は、必ずしも分かり易いものではない。個々の事実は興味深く、論考の意義は疑うべくもないが、それは、著者が

寓目した板木とその周辺資料から、最大限の情報を引き出したからであって、率直に言えば、一件ごとの結論の孤立感否みがた
い。おそらくここには、文献に比して研究資源の属性⇨偶然性に
負うところが大きい、という板木研究の宿命が呈されているので
あろう。しかしながら、帰納されるべき板木書誌学への展望は明
らかで、むしろ、今後の板木研究が本書の水準から始まること
が、何より幸いであると思われる。

なお、本書は二〇一〇年九月に立命館大学へ提出された博士論
文に基いており、二〇一四年五月に、第三十五回日本出版学会賞
奨励賞を受賞したことを付記する。また、本書に次いで、永井一
影『板木は語る』（二〇一四年、笠間書院）が上梓されているの
で、併せ読みたい。

（A5判、三二八頁、二〇一三年二月、法蔵館、七八〇〇円）

（ひろせ・ちさこ 同志社女子大学特任教授）